

歴史学者
国際日本文化研究センター准教授

磯田道史 君

【いそだ みちふみ】

1970年岡山県生まれ。文学部史学科、文学研究科博士課程修了。茨城大学准教授、静岡文化芸術大学准教授などを経て、2016年より国際日本文化研究センター准教授。2003年に出版した『武士の家計簿—「加賀藩御算用者」の幕末維新』が好評を博し映画化。他著に『無私の日本人』(その中の一編の「穀屋十三郎」が『殿、利息でござる!』として映画化)、『天災から日本史を読みなおす—先人に学ぶ防災』など多数。NHK BSプレミアム『英雄たちの選択』の司会者もつとめる。

幼い頃からの古文書好きが高じて歴史学者に。 著作が『武士の家計簿』『殿、利息でござる!』 として映画化

古文書と本の虫 図書館で倒れて救急車騒ぎに

——磯田道史さんがいちばん幸せなのは、古文書を探索しているとき。新しい発見に、ゾクゾクするぐらい興奮するそうです。先祖は岡山藩の支藩、鴨方藩の重臣を務め、家に伝わる古文書を小学生の頃から読んでいたそうですね。

磯田 漫画より古文書好き、変わり者の子供でした。古文書だけでなく、地元作家の内田百閒の本を繰り返し読み、家にあつた日本文学全集も中学時代に全巻読破。古文書と本のオタクですね(笑)。

江戸時代の先祖には殿様の教育係がいて、祖父は土木技師、父は農芸化学の研究畑の人間でしたから、生まれながら探求心は旺盛だったようです。高校卒業の頃にはかなり古文書を読むことができました。京都府立大学史学科に進学したのも、京都には遺跡や史跡がたくさんあり、古文書もたくさん読めそうだったからです。

しかし、そこで見えない壁にぶつかります。当時、多くの大学図書館は、在校生と卒業生にしか本を貸し出しておらず、府立大以外の大学の本をじっくり読むことができないのです。僕の読書欲はそれに耐えられず、悶々としました。どの

大学に行けば、もっと本を読めるのか……。リサーチを重ねて、膨大な蔵書を持つ慶應義塾に狙いを定めて、再受験をすることにしました。

もう一つ義塾を選んだ大きな理由があります。ある図書館で、歴史の本を開いているときに、速水融教授の数量経済史の本に出会いました。諏訪地方の農村人口史についての内容でしたが、その面白さに衝撃を受け、この先生に指導を受けたいと強く思ったのです。入学試験対策として、ゴードン・チャイルドの考古学の本など、歴史関係の英語本をひたすら読みました。興味がある分野の本ですら読みました。興味がありません。文学部の試験は、英語の長文読解を特徴としていたため、この作戦は成功して無事に合格しました。



慶應義塾図書館 日本史学専攻の書棚



指導を受けた速水教授（現在、名誉教授）

——ある教授に指導を受けたくて、という話は聞きますが、図書館蔵書が大学選びの決め手になったというのは、筋金入りの本の虫ですね。義塾の図書館には満足しましたか。

磯田 蔵書の質・量・多様性、すべてが期待以上でした。ちょうど湾岸戦争の最中だったので、戦争理論や各国の戦術書を探したことがあったのですが、英米のみならず、スイスや中国の人民解放軍についての本まであったのは驚きでした。探せば見つかる。その喜びで図書館にも引き続きあげく、館内で倒れて救急車で病院に運ばれたこともあります（笑）。ただ、僕の入学と入れ違いのように、速水教授が京都の国際日本文化研究センターに移られていたのはショックでした。しかし、幸いなことに経済学部での授業は継続されていて、田代和生教授の研究室内に速水教授の机が残っていました。

居る時を狙って質問し、丁寧に答えていただきました。質問がしたくて、真剣に勉強をしますから、居たり居なかったりの先生も、学生にとって案外悪くないかもしれません。また速水門下の先輩たちにもお世話になりました。かつて大阪の適塾で、緒方洪庵が不在の時に、福澤諭吉先生が代行で教えていたようなものです。

大学院を通じて長く指導を受けたのは田代教授です。素晴らしく古文書に通じていらして、古文書大好きな僕は、大いに学ばせていただきました。また、現在塾長である清家篤先生の商学部の授業も受けました。

——史学科の学生が、なぜ商学部の授業を？

磯田 義塾の先生の本をいろいろと読み、この人の授業を受けたいと思えば、他学部でも受講しました。清家先生もその一人です。ライフコース、つまり人の一生における収入と支出についての講義で収入カーブの概念を知り、これは面白そうだとロシアのチャヤノフの農業経済を学ばきっかけになりました。充実した蔵書と、質問に気軽に答えてくれる優秀な先生方がいる義塾で学んで、本当によかったです。

——勉強以外のキャンパスライフは楽しみましたか？

磯田 「入学して、銀杏の葉が散るまでに彼女ができないと、4年間彼女なし」と、塾生に流布されている格言に、見事にはまった塾生時代で、女性にはまったく縁がありませんでした(笑)。まあ図書館で倒れるような書物オタクですから、当然といえば当然です。ただし付け加えると、その後、表参道のギャラリーで出会った人と結婚しました。聞けば彼女も塾員。しかも先祖をたどると、母方は岡山の僕の先祖のご近所の出身という古文書的なオマケがついた縁でした。

一方、所属した考古学研究会はなかなか楽しかった。実際に古墳調査に参加するアウトドア派もいましたが、図書館から離れたくない私はインドア派。仲間と考古学の本についての議論を楽しんでいました。顧問の鈴木公雄教授が運び込んだ土浦の上高津貝塚の土を、地下2階の換気の悪い部屋で、黙々とシジミ、アサリ、ハマグリに分類したのも懐かしい思い出です。その部屋にはなぜかしやれこうべが保管されていました。ウソかマコトか若い女性のもの先輩に教えられたその頭蓋骨の傍らで、夜中に作業をしているうちに、持ち前の「もっと知りたい

欲」がわいてきました。しゃれこうべについての本を何冊も読んで研究し、「うーん、この頭蓋骨は美人だ。女優の鶴田真由さんに似ている」などとつぶやいて、変人ぶりに拍車がかかってしまいました(笑)。

歴史学は趣味嗜好品ではなく 現代を良くするための実用品である

——33歳で『武士の家計簿』を刊行されています。出版の経緯は？

磯田 企業に就職する気がなかった僕は、先生方のはからいで義塾の古文書の整理係と日吉での非常勤講師、さらに通信教育課程のスクーリング授業の講師をしていました。同時に、個人の研究テーマとして、江戸時代の武士の暮らしに興味があり、時間を見つけては各地の図書館、公文書館、古書店などで、資料を探していました。江戸時代は五公五民、四公六民といわれる年貢割合が普通で、人口比率で約5%の武士が、米の半分近くを取り上げています。その年貢米を、武士たちはどのように消費していたのかを知りたかったのです。そしてある日、神田神保町の古書店で、加賀藩士の家計簿を記した古文書に出会い、その驚くほど詳細な記述に、小躍りして喜びました。

——その古文書が著作のベースになった古文書ですね。

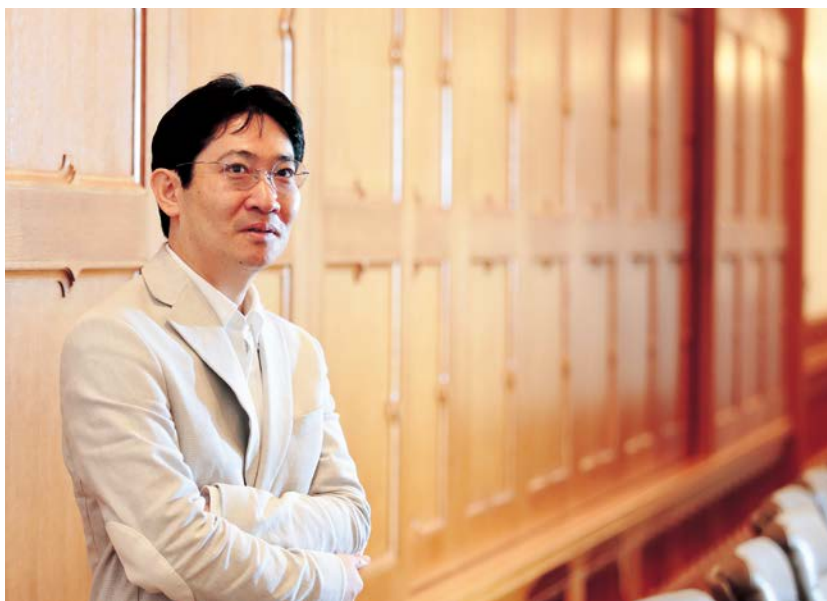
磯田 はい。しかし最初から本にしようと思ったわけではありません。まずその資料をもとに、義塾の通信教育課程のスクーリングで講義をしました。通信の学生には、大学を卒業後、仕事をしながら、あるいはリタイアしてから、さらに学びたいという人がかなりいます。その層を中心に、講義は意外なほど反響がありました。しかし限られた時間では話しきれず、本にすることを約束して、約10日間で書き上げたのです。当初は、通信の教科書・教材の制作を行っている慶應義塾大学出版会から出すつもりでした。ところが、出版会に話を持って行く前に、図書館内で知り合っていた編集者の先輩塾員が、その原稿を読んで「これは面白い」と。あれよあれよと新潮新書として出版されたのです。もともとは通信の学生読者を念頭に置いて書いたものですが、書き直しはしていません。

——そして一般書として注目され、映画にもなっただヒット。読者を引き込む語り口は、広範な読書体験から生まれたのでしょうか。その後も、著作やテレビで、私たちに歴史を知る面白さを伝え続けています。歴史を学ぶ意味はどこにあるの

でしようか？

磯田 若い人たちは、歴史を受験のための暗記物、あるいは一部の人の趣味嗜好品と思っているようですが、これは大きな誤解です。歴史は嗜好品ではなく、実用品であることを、まず理解してください。たとえば福島の子力発電所の事故は、歴史上の津波を軽視したから起きたものです。古文書から津波の高さを学んで、それを生かしていれば、こんなことにはならなかったはずですよ。

また、歴史学は経済に関係ないと思われがちです。しかし今の日本経済は、モノづくりから物語づくりへと大きく変化しています。GDPに占める観光業の割合は年々増えており、伸びしろも大きい。中国やインドなど、中間層が発達中の国の人たちの観光意欲は、増すばかりです。その観光客を引き付けるのは日本が発信する物語であり、その物語づくりの基礎になるのが間違いなく日本の歴史です。観光のみならず、外貨を稼ぐアニメ映画やソフトウェアの制作でも同じことがいえます。ストーリーの、キャラクターの、さらに時代や場所設定のベースにあるのは歴史です。津波などの災害から身を守るにも、今後の経済を成長させるにも、歴史学ほど現代につながっているものは



ないと思っています。先日、ソ連の崩壊、アラブの春、アメリカの衰退を予測したフランスの歴史学者のエマニュエル・トッドと対談をしました。歴史は現代に生かすべきものであるという思いは、同じでした。

——最後に塾生へのメッセージを。

磯田 塾生の頃、図書館で読んだアイン

シュタインの随筆で「得たお金や地位で人を評価するのは誤り。世の中にどう貢献したかで評価しなければならぬ」という意味の文章を読み、なるほどと思いました。この言葉から、まず思い浮かべるのが福澤先生です。爵位や官位の地位を求めることなく、また学問を学ぶだけにとどめず、実学の精神を説きました。税金を使う側より、人の役に立ちながら税金を納める側の人間を育てることが重要と、「時事新報」をはじめ、塾員とともに日本の津々浦々で新聞を発行し、各地で産業を興す人々を、新聞や日本最初の社交クラブである交詢社、あるいは三田会をつないで、地域振興を支えました。富国を目指す当時の日本への最大の貢献です。私も、歴史を実学として現代に生かすことで、社会に貢献したいと思っています。塾生の皆さんにも、卒業後、学んだことを生かして世の中に貢献することを期待しています。

——本日はありがとうございました。